原 著

糖尿病児の自己管理の可能性予測への試み — 注射に対する気持ちの母子一致度の視点から —

横田 碧・兼松百合子・野口美和子

内田 雅代・永田 七穂

千葉大学看護学部

An attempt on Estimating Self-care Management of Diabetic Children

— Feelings of Children and Mothers
Toward Insulin Injections —

Midori Yokota, Yuriko Kanematu, Miwako Noguchi,

Masayo Uchida, Nanaho Nagata,

School of Nursing, Chiba University

Abstract

The purpose of this study is to find a measure to estimate the developmental of self-care behaviors of diabetic children. A questionnaire was constructed, using the theories of transactional-analysis and personality development, to investigate (1) how diabetic children were feeling about insulin injections and (2) how they were feeling toward others when doing injections.

35 couples of diabetic children and their mothers completed the questionnaire independently.

The data were analyzed in terms of the degree of agreement between children and mothers, and the developmental levels of children's attitude toward injections. Also they were compared with clinical observations of nurses in Diabetic Clinic.

The results indicated the usefulness of the questionnaire as a measure to estimate the developmental status of self-care behaviors. More favorable feelings and attitudes toward injections and mothers appeared to exist among children with good clinical evaluation, less favorable and immature feelings and attitudes among those with poor clinical evaluation.

Further study is expected to revise the questionnaire to get more accurate estimation with higher reliability.

要 旨

糖尿病児の自己管理状況が、児の発達と共にどのように変化していくのかを予測する方法を求めて、交流分析理論・人格発達理論を援用して、①注射への気持ち、②注射をする

時の他者への気持ち, について, アンケート項目を作成した。

母子が独立に記入したアンケートを, 母子の一致を指標として, 児自身および母子関係の発達に応じて分類したものと, 自己管理状況の臨床的直観による分類との相互関係について, 比較検討した。

その結果, 自己管理の良・不良の両極を予測するのには, このアンケートは, かなり役立つ可能性があることが見出された。

今後さらに, 個別のケースの詳細を吟味することによって, より予測精度の高いアンケート項目を作っていきたい。

I はじめに

看護はその中に基本的に, 構造としての「人間同志の相互関係」と, 機能としての「心の相互作用」とを含んでいる。

ところが, 眼に見えないこれらのものを確認し合うことは, 同時に流れる時間の中で, 関係を共にする過程を持った者同志には, ある程度理解し合えるが, 誰でもが全てのの人にそのような関係を持つことは不可能であり, 関わりを持っていない人に, その味わいを伝達するのには, かなりの困難を伴う¹⁾。

そこで, ある時点での「心の持ち味」や, 「関係のありよう」を何らかの形で定着化し記録化して, 時間的変化に従って, 過程としてその変化の流れを追っていけるようにする方法が必要である。

看護が, 個別的・流動的な「人間の変容過程」を, 少しでも健康的な方向へ向かって促進して行こうとする時には, ①現状認識から予測へ, ②予測に立った働きかけ方の選択, ③相手への働きかけと相互作用の実践, ④働きかけの結果の確認, ⑤現実認識の修正へ, のラセン的進行を図っていくのである。これらの「看護活動過程」を研究の対象とするには, 過程の流れを表現する方法や道具が必要となる。今回は, そこに接近する一步として, そのような意図をもって作成したアンケート項目を, 保健指導継続中のインシュリン依存型の糖尿病児の自己管理状況調査票の一部に導入してみた。

ちなみに, この研究計画の全体は, インシュリン依存型の糖尿病児が, 思春期に向かって, 母親依存の状態から自己管理へと移行していく

過程には, どのような課題があり, また保健指導上のポイントはどこにあるのか, また母子の関係性によって効果的な指導方法は異なるのではないか, などの問題意識をもって継続されてきている^{2)~5)}。今回は, そのうちの「予測への試み」の部分について報告する。

II 研究方法

(1) アンケート項目の作成と記入の方法

交流分析理論^{6)~8)}を援用し, 自我状態を基礎において, ①自己内の気持ちと, ②周りにいる他者への自己の気持ち, の両側面から, 同一の事象が, 母子それぞれにどのように捉えられているかを, 明らかにしやすいようにと考えて項目を設定した。(項目内容は<表1-①②>参照)。

項目は同一だが, アンケート用紙は母子別々とし, 各自が独立に記入した。

(2) 対 象

千葉大学病院小児糖尿病外来に通院中のインシュリン依存型糖尿病児で, 継続的な保健指導を受けている35例の母子の組み合わせ。

(3) 研究素材

母子別々に独立して記入したアンケート項目の解答結果の組み合わせ。

(4) 整理の階梯

1) アンケートに記入されたものを, 母子間の一致・不一致の視点から整理した。

2) 人格発達⁹⁾の視点から, 母子関係と自立度

とを組み合わせ、より望ましいと思われる方向性へと順序づけを試みた。

3)「注射に対する気持ち」を「母子間の一致」と「発達の方向性」の二つの視点から、ブロック化した。

4)「注射時の他者への気持ち」を「母子の信頼関係」と「発達の方向性」の二つの視点からブロック化した。

5)アンケートからは独立に、臨床経過を追っている研究者が、自己管理の総合的状况をブロック化した。(以下「臨床的直感」と記す)

6)「臨床的直感」と、アンケートによるブロック化とのつき合せをした。

III 結 果

整理の階梯に従って、以下にその結果と特徴を述べる。

(1) アンケート項目への回答

アンケートに記入された○印を、項目別・組み合わせ別に一覧表とし〔子のみ○・母のみ□・母子共に●〕として整理した。結果は<表1>に示した。

① “注射に対する気持ち”について

1)対象者が小5以上ということから“言われないとしない”“言われるからする”という〔順応の子供(AC)の自我状態〕の現れである全面的受身のものは、母子共になかった。受動的なものは“言われたらする”という習慣性と思われるものが少数のみに留まった。

2)自己の感情の率直な表現である“いやだ、したくない”という〔自然な子供(FC)の自我状態〕は、自己の確立に至る変動期の中学生に、母子一致して見えている。そして次第に、“しかたない、やるしかない”という〔(AC)と(FC)の組み合わせ〕に、内的状態が移り変わっていくことが現れている。

3)教えられたことが取り入れられたものに留まっている時の“しなければならない”という〔批判的親(CP)の自我状態〕に、母子共にあるものが一番多かった。特に、子より母の方に多いのが目立った。

これは、母が思っているよりも、実際には子の方が成長し先に行っているのに対して、母の方の気持ちの切り替えが一步遅れている傾向性を示唆し、子供の自立の促進を妨げる方向に働く危険性への注意を喚起するものである。

4)自己にとっての新しい課題の内面化を示す“必要だからする”という〔成人(A)の自我状態〕にあるものは、2番目に多く、自己の内面の確立へと年齢と共に発達していく小児科受診者の特徴と方向性を示している。

② “注射時の他者への気持ち”について

1)<表1>のa. a'. b. b' 項は〔(AC)の自我状態〕であるが、特殊な例を除いては、ここに留まっているものは少ない。

2)c 項は〔(CP)の自我状態〕であるが、これも0である。

3)d 項は〔反抗の(AC)と(CP)の組み合わせ〕であるが、これらはかなり少数である。

4)f 項は子から母へ向ける〔保護的親(NP)の自我状態〕であり、子の中の自己が育って来て、身近な他者へ配慮が向くようになり始めてきたことを反映しており、子の方に多いのは当然である。

5)g 項は〔(AC)と(NP)の組み合わせ〕であり、子の内面に母に対する信頼への確信が育ってきたことを示すもので、自立への内的準備状態の形成を反映している。

6)g' 項は〔(A)と(FC)の組み合わせ〕であり、子の暦年齢による発達と母子関係の様相がかなり現れている。

③ 個別のケースの特徴について

1)ケース番号、3. 4. 9. 12. 13. 17. 25. 26. は、母のみが多く、母側の詳しい検討をしてみたいケースである。<表中の*印>

2)ケース番号、4. 5. 9. 10. 13. 28. は、母子一致の項目が0であり、母子関係に対する配慮を検討してみたいケースである。<表中の※印>

(2) 母子間の気持ちの一致・不一致

母子間の一致(●)を指標として、“①注射への気持ち”について、自己管理上のぞましいと思われる性質に応じて、A. B. C. の3群に

表1 アンケート質問とその結果一覧

<子への質問>

4-(7)注射に対する気持ちは、次のどれにあたりますか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(表の①a)～g)項目)

4-(8)注射をするとき、おとうさん、おかあさんに対して、どんな思いを持ちますか。あてはまるものに○、あてはまらないものに×をつけてください。(表の②a～g' 項目)

<親への質問>

4-(3)注射をするときのお子様の様子や気持ちは、どのようだと感じられますか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(表の①a)～g), ②a～g' 項目)

<結 果>

		① 自己内の気持ち							②他者への自己の気持ち										計			母への配慮必要？	母子関係への配慮必要？	
ケース番号	学 齢	a)言われないとしない	b)言われるからする	c)言われたらする	d)いやだ・したくない	e)仕方ない・やるしかない	f)しなければならぬ	g)必要だからする	a' 親がしてくるはずだ	b' してくれないなんて	b' やらせるなんてひどい	c 親がしてくれるべきだ	d 親のせいだ	e 手伝ってほしい	f 親がかわいそう	g 必要時してくれる・安心	g' 必要時は自分から頼む	子のみ	母のみ	母子一致				
1	小5						●									○		1	0	1	**	※		
2	小5						□	●								○		1	1	1				
3	小5					□	□	●									□	1	3	0				
4	小5						□	□					○				○	1	3	0				
5	小5					○		○					○			○	□	5	0	0				
6	小5		□			□	●	●								○	●	1	2	3				
7	小5			□			●	●							○	●	○	2	1	3				
8	小5			○			□	□								○	●	3	2	0				
9	小5		○	□			□	□	□								□	0	6	0				
10	小6				○		□	□	○		○						□	4	2	0			*	※
11	小6					□	●	□								○	○	3	2	1	**	※		
12	小6					□	●	□									○	0	3	1				
13	小6			□	□	○	□	□		□	□						○	2	6	0				
14	小6					●	□	●								●	●	0	1	5				
15	小6						●	●								○	●	1	0	3				
16	中1			□	○	□	□	○							○	○	●	5	2	1				
17	中1			●	□	□	□	□						□			○	0	3	2			*	
18	中1					●	●	●									○	1	1	1				
19	中1					□	□	●									○	0	1	2				
20	中1			○	□		●	○						○			○	3	1	2				
21	中2						●	●									○	2	0	1				
22	中2					●	●	□								○	○	3	1	2				
23	中3						●	●								○	○	2	1	2				
24	中3					□	●	□								○	○	3	2	1				
25	中3			●	●	□	□	□					□				□	0	4	2	*			
26	中3			□	●	□	□	□									○	1	3	1				
27	高1			●			□	●								●	○	2	0	4	**	※		
28	高1						○	□									○	2	1	0				
29	高1					●	●	●									○	0	0	3				
30	高1					●	●	●									●	0	0	4				
31	高2						□	●									○	2	1	1				
32	高2					●											○	0	0	1				
33	高2					●	□	□								○	○	2	2	1				
34	高3						□	●									○	1	1	1				
35	20才			○	●	●	●	●	□				●		●	○	□	2	2	5				
子のみ				1	4	4	1	3	1			1		3	1	9	17							
母のみ			2	5	7	14	10	3			1			3	4	2	6							
母子一致			3	9	17	14	14			1	1		1		3	3	9							
計		0	0	3	12	20	32	27	4	0	1	2	0	7	5	12	21	26				8	6	

ブロック化した。分類の基準と結果は＜表 2－①＞に示した。

1) A 群：g) の項目について、母子が一致していたもの＝「自己への内面化の段階に近いもの」は、14 例であった。

2) B 群：f) または e) 項のみの母子一致をみたもの＝「まだ自己内で、取り入れたものに対する違和感を感じている段階」は、11 例であった。

3) C 群：g), f) 項に母子一致をみなかったもの＝「課題の取入れが不十分なもの」は、10 例であった。

(3) 「信頼＝安心」の母子関係

“②注射時に母子双方が相互に抱く思い”を、母子一致度(●)と、子の内面に形成されている「信頼＝安心感」の度合いから、母子間の関係成立の性質に応じて、A. B. C. の 3 群にブロック化した。分類の基準と結果は＜表 2－②＞に示した。

1) A 群：g' および g 項に母子一致をみたもの＝「母子の信頼＝安心関係ができているもの」は、10 例であった。

2) B 群：g' および g 項に、少なくとも母子の方は同意しているもの＝「母子一致にまでは至らなくても子の内面には、安心＝信頼感があるもの」は 16 例であった。

3) C 群：g' および g 項の段階にまで、子が至っていないもの＝「母の一方的思い込みが強いもの」は、9 例であった。

(4) 自己管理状況への臨床家の総合的判断

アンケートとは独立に、継続的に直接の保健指導にあたっている 3 名の共同研究者の討議により、臨床的経過と指導過程の総合的判断＝「臨床的直感」を“良好”から“気がかりなもの”へとブロック化した。臨床には流動性があるために断定し切れないものも多く、A 群：8 名、A～B 群：12 名、B 群：7 名、C 群：8 名、の 4 群の分類となった。結果は＜表 3－③＞に示した。

(5) アンケートと臨床的直観の関連性

臨床的直観とアンケート結果との相互関連性を概観するために、双方の群別を比較対照し「アンケートと臨床的直観のズレ」が 2 段階に

表 2 注射をする時

①気持ちのブロック化

母子共に気持ちの一致した項目	組合数	群化
g) のみ	5	A 群
g) f)	4	
g) f) e)	3	
g) f) d)	1	
g) e)	1	
f) のみ	8	B 群
f) e)	1	
e) のみ	2	
e) d)	3	C 群
母子不一致	7	

②他者への気持ちのブロック化

信頼＝安心の母子関係の度合	組合数	群化
g' g 一致	1	A 群
g' 一致	8	
g 一致	1	
g' g 子のみ	7	B 群
g' 母, g 子	3	
g' 子, g 母	1	
g' 子のみ	2	
g' 子のみ	3	
g' g 母のみ	1	C 群
g' 母のみ	2	
母子一致なし	6	

およぶものを基準として整理して、①注射への気持ちを軸としたもの<表 3-①> ②信頼=安心の母子関係を軸としたもの<表 3-②> ③臨床的直観を軸としたもの<表 3-③>を作成した。表中のアンダーラインが 2 段階のズレのあったケースである。

①注射への気持ちによるブロック化と臨床的直観のズレが大きかったケースは 7 例 (1/5) であった。群別に見ると、A・B 群のものは臨床的直観との関連性が見えるが、C 群の関連性はやや低かった。

②信頼=安心の母子関係のブロック化と臨床

的直観のズレが大きかったケースは、12 例 (約 1/3) であった。母子関係のあり方は、即、直接的に臨床的経過と結びつく性質のものというより、もっと長期にわたっての影響を検討する必要がある部分のようである。

③臨床的直観とアンケートによるブロック化の全体とを比較してみると、ズレを生じたケースは、A 群・A~B 群では 1/2, B 群では 5/7, C 群では 1/8, であった。つまり、アンケートと臨床的直観の関係は、C 群についてはかなり関連性が高かった。

以上の結果は、ブロック化の過程そのものが

表 3-① 「注射への気持ち」を軸としての比較

母子関係への配慮必要？

※ ※ ※※ ※※

母への配慮必要？

*

*

***

***

③臨床的直観	○○○○○○○○○○○○○○△△△	○○○○○○△△××××	○○○○△△××××
①注射への気持ち	○○○○○○○○○○○○○○○○○○	△△△△△△△△△△△	××××××××××
ケース番号	6 30 7 19272335 2 1534291431 3	222111331220 1 2418 8 32	162825 9 1710 5 2613 4
アンケート：臨床 のズレ 2 段階	3		4

表 3-② 「信頼=安心の母子関係」を軸としての比較

母子関係への配慮必要？

※

※

※

※

※

※

母への配慮必要？

*

*

**

***

*

③臨床的直観	○○○○○○○○△△△×	○○○○○○○○○○○○△△××××	○○○○○○△△××
②信頼=安心 の母子関係	○○○○○○○○○○○○○○	△△△△△△△△△△△△△△△	××××××××××
ケース番号	6 30 7 191516142017 8	27233534222111332831 3 2418 5 2613	2 291225 9 1 1032 4
アンケート：臨床 のズレ 2 段階	4	3	5

表 3-③ 「臨床的直観」を軸としての比較

母子関係への配慮必要？

※ ※

※

※※※

母への配慮必要？

*

**

*

*

*

**

②信頼=安心 の母子関係	○○○○○○△△△×	○○△×○○△△△△×△××	○○△△○○××	○○△△×△△△×
①注射への気持ち	○○○○○○○○○○○○	○○○○×△△△△△×××	○○○○△×△×	△△△△××××
③臨床的直観	○○○○○○○○○○○○	○○○○○○○○○○○○○○	△△△△△△△△	××××××××
ケース番号	6 30 7 19272335 2	1534291622211133122825 9	14 3 312017 1 10	8 24183226 5 13 4

(A 群: ◎ A~B 群: ○ B 群: △ C 群: ×)

連続性のあるものに仮に線をいれているものであり、おおまかな傾向性を見ようとする研究であるので、今回は統計的検討はおこなわなかった。

IV 考 察

上記の結果を総合すると、以下のような傾向性や可能性が示唆されると考えられる。

(1) 交流分析理論に基礎をおいて作成したアンケートは、長期に経過を追いながら総合的に得られた臨床的直観と、かなりの関連性があるといえる。特に、自己管理がうまくいくであろうと思われるケースおよび困難が多いだろうと思われるケースを予測するのには有効度が高いと考えられる。

このことは、アンケートを実施して項目の内容を検討することによって、一般的な知的教育のみでも内面化・実行化をしていけるケースを見当づけし、指導プログラムを立てる上での参考にすることができることを示唆する。

(2) アンケート上で、C群に分類された項目があるケースの多くは、個別的な配慮を要すると思われるケースと重なっている。このことは、一般的な知的教育のみならず、個別の課題に応じて配慮された個人指導の必要性を示唆している。

さらに、アンケート項目の内容や母子の関係性を詳細に吟味することによって、問題の性質に応じた個別の課題に指導の焦点を絞っていくときの参考にすることができると考えられる。

(3) 中間群(B群)については、流動性があるので、一般的な知的教育や受診時の指導や実際の生活体験により、機会的に学び得るかもしれないケースとして、通常の治療経過を見ながら、時に応じて個別指導をしていくことでも、発達に応じた進歩がみられる可能性があるとも考えられる。そこで、集中的・個別的保健指導能力が乏しい状況にあるときには、優先順位の見当づけにあたってリスクを少なくするメドにすることができると考えられる。

V おわりに

前述の考察の観点から推して、集団的・一般的知識教育で効果が上がると思われるケースと、焦点を定めた個別的指導が必要なケースと、機会教育で当面やっていけるケースとを、おおまかに分ける見当づけが可能になりそうである。このことは、特別な保健指導担当者を置きにくい条件の臨床場面において、少ない保健指導能力と時間を、緩急軽重に応じて配分することを可能にし、かつ保健指導の割愛によるリスクを少なくすることにも通じると考えている。

今回は触れなかったが、アンケート回答の項目の性質と母子間の組み合わせにより、各ケースの母・子・関係のどの部分に、どのようなアプローチをすれば有効かの個別的予測も試行中であり、次の研究計画としては、①現在指導中のケースの指導上のポイントを予測し、それに添って個別指導を実践してみて、結果を検討すること、②新規ケースの初期にアンケートの記入を実施し、指導のポイントを予測した上で、実施の結果を継続的に積み重ね、予測度の高いアンケートに練り上げていくことなどである。

参考文献

- 1) 横田 碧：「面接」の学習とスーパービジョンの意味、医療ソーシャルワークの解決技法、2-5、東京都衛生局、1985。
- 2) 兼松百合子 他：糖尿病児の療養生活上のルティンに対する気持ちについて、日看科会誌、3(2)、16-17、1983。
- 3) 武市雅代 他：糖尿病外来通院児とその母親の日常の療養活動に対する気持ちについて、第15回日本看護学会集録小児看護、37-42、1984。
- 4) 武市雅代 他：糖尿病児の療養活動の自立の実態と母親のかかわり、日看科会誌、5(2)、60-61、1985。
- 5) 兼松百合子 他：糖尿病児の血糖コントロールの自覚とセルフケア行動について、千葉大看紀要8、1-9、1986。
- 6) Thomas A. Harris: I'M OK - -YOU' RE OK, 1969. 春木豊他訳、I'M OK - -YOU' RE OK,

- 人間関係が生きかえる—, ダイヤモンド社,
1971.
- 7) 国谷誠朗: 孤独よ, さようなら —母親からの脱却—, 集英社, 1978.
- 8) 杉田峰康: 人生ドラマの自己分析, 創元社,
1976.
- 9) John Bowlby: Attachment and Loss, Vol.1. Attachment, 1969, Vol.2. Separation, 1973, Vol.3. Loss, 1980, 黒田実郎他訳, 母子関係の理論, I 愛着行動, 1976, II 分離不安, 1977, III 愛情喪失, 1981,* 岩崎学術出版社.